

大学における西洋史演習とオンライン授業

ーイギリス近代史を中心にー

青柳かおり (大分大学教育学部)

筆者は2020年度後期に、教養教育科目、イギリス近代史という演習形式の授業を担当した。この科目は例年、対面で受講者のプレゼンテーションとディスカッションおよび教員のコメントを中心に進めていた。周知のとおり新型コロナウイルスの影響によって、2020年度からは本学を含めて各大学においてオンライン授業を取り入れる必要性が出てきた。オンライン授業には様々な形式があり、筆者は2020年度前期にリアルタイムで講義形式の授業、世界史特講を行っていたが、後期は演習の授業を実施することになった。講義を中心とした授業ではパワーポイントを画面共有しながら教員が講義し、受講者から質問を受け付けて、moodleで課題を毎回出していた。講義は問題なく実施することができたが、後期には筆者は初めてzoomを利用して演習を行うことになった。演習の場合、講義よりも受講者の報告や発言が多くなるため、オンラインでトラブルなく進められるのか、議論が活発に行われるのか不確かであった。本稿はイギリス近代史の授業実践を通して、オンラインでの演習の学習成果および課題を検証し、オンライン授業の進め方の改善を図るものである。

キーワード： 高等教育、授業改善、西洋史、オンライン授業、演習

1 はじめに

筆者は2020年度後期の教養教育科目、イギリス近代史をオンライン形式で実施した。この授業は例年、対面で受講者がそれぞれイギリス史に関するテーマを設定して報告し、全員で質疑応答を行っていた。近代はおよそ17世紀末あたりから19世紀全般を意味しているが、実際は近代史に限らず学生の興味のある時代や分野をテーマとして自由に設定してもらっていた。また、テーマの選択や参考文献に何を使用するかも学生に任せ、教員は指示をしなかった。これまで演習は対面で行うものという前提があったように思われるが、2020年度は対面ではなくzoomを用いてリアルタイムで演習を行うことになったのである。確かに、最初はオンライン授業という形式は不慣れた教員と学生にとってはややハードルが高いと思われた。

しかし、お互いにパソコンやzoomの操作に慣れていけば、安全に授業を実施できる以外にも、効率的かつ効果的な授業を展開することができて、様々な利点があることに気づかされた¹⁾。筆者はすでに2020年前期にzoom(同時双方向)で世界史特講という講義を行っており、また、学生側も様々なオンライン授業を受講していたため、教員・学生ともにオンライン授業にある程度適応していた。世界史特講は、教育学部において中学校社会の教員免許の取得を目指す学生のための選択科目である。古代から現代までのイギリス史を中心とした西洋史概説という内容であり、これまでの対面形式で用いていたパワーポイントの資料を引き続き使用した。その際も同時双方向のオンライン授業のメリットを実感できた。教室でのパソコンやプロジェクターの立ち上げといった作業がなく、

すぐに教員のパソコンで授業が開始できるため時間の余裕ができた。また、学生も基本的に自宅から大学への移動の必要がなくなった。授業の内容においても、対面の時と比較して大きな問題はなく、予想以上に順調に進めることができた。ただ、よく言われているように、学生は基本的にビデオオフおよびミュートにしており、表情や発言といった反応が分かりにくい面があった。そのため、何度も内容を理解しているか教員側で確認したり、分からない点は後日でもメールで問い合わせるように促した。学生からは授業中にチャットで質問や意見が来ることがあったが、このチャット機能は有益であった。授業に限らず zoom での会議においても、発言しづらい場面で質問したい時などチャット機能で先生方に質問ができるので便利であった。

このように、すでにリアルタイムのオンライン授業は経験しており、比較的順調に実施することができていたのであるが、一方的に教員が話すことが多い講義と比較して、受講者の発言が中心となる演習形式は初めてであり、オンラインで質疑応答が活発に行われるのか不安があった。演習形式のため本授業は履修登録者を 20 人に制限しており、抽選によって 20 人が履修登録していた。内訳は経済部の学生 8 人と理工学部学生 12 人で、全体的に一年生が多かったが、理工学部には四年生が 2 人含まれていた。なお、例年と同様に moodle を活用しながらアクティブラーニングを実践した²⁾。講義形式では学生はビデオオフであったが、この演習では全員にオンにしてもらい、なるべく対面のようにお互いの顔や表情が分かるようにしていた。

オンライン授業であっても質を落とさず、これまで対面で行ってきたことと同様のレベルの授業を行うことができるのか、筆者は実践してみたいと考えた。本稿ではイギリス近代史の授業を通して、オンラインでの演習の学習成果および課題を検証するとともに、オンライン授業の改善点について明らかにしたい。

2 授業の概要

ここでは、この授業の目的や内容についてシラバスを中心に述べたい。

【授業の概要】

イギリスは世界史において重要な役割を果たしてきた。この授業ではイギリス史に関する様々なテーマについて報告とディスカッションを行い、イギリス史・西洋史についての知識を得るほか、異文化理解を深めていきたい。

【具体的な到達目標】

1. イギリス近代史の主要な事件や人物を他者に分かりやすく説明できる。
2. 関心のあるテーマを選び、報告および質疑応答を行い、建設的な議論をすることができる。
3. 多様な文化に関する幅広い教養を身につけ、西洋史に関する深い知識を修得する。
4. 専門的な知識を活用し、国際化社会の変化や要請に、柔軟かつ的確に対応できるようになる。
5. 関心のあるテーマについて適切な情報を収集し、分析することができる。

【授業の内容】

以下のようなスケジュールを予定しているが、受講者の人数や関心によって変更の場合もある。

1. ガイダンス
2. イギリス文化
3. イングランド宗教改革 以下、毎回、報告とディスカッションを行う。
4. ピューリタン革命
5. 王政復古と名誉革命
6. イギリスの植民地の拡大
7. 紅茶と砂糖の貿易とアメリカ植民地
8. 産業革命
9. ジェントルマンの支配と民主化
10. ヴィクトリア朝の社会
11. 帝国主義
12. 第一次世界大戦
13. 第二次世界大戦
14. 現代のイギリスと EU
15. まとめ

【アクティブラーニング】

演習，討論，ミニレポート

教員が一方的に話すだけにならないように，学生に意見を述べてもらう場を頻りに設ける。

【時間外学修の内容と時間の目安】

準備学修 文献収集 5 時間。 参考文献を用いて予習する 15 時間。 発表の資料を作成し準備する 10 時間。

事後学修 コメントを用いて復習する 5 時間。 レポートを作成する 10 時間。

【教科書】

使用しない。

【参考書】

川北稔編『世界各国史 イギリス史』山川出版社，1998 年。

授業中に文献リストを配布する。

【成績評価の方法及び評価割合】

報告内容 40%，授業中の発言 20%，ミニレポート 20%，学期末レポート 20%

報告および最終レポートの提出を単位取得の条件とする。

【注意事項】

ガイダンスで授業の進め方の詳細を説明し，報告者の日程を決めるので必ず出席してください。事前にテーマを考えておいてください。報告内容が重ならないように調整します。

【備考】

演習形式のアクティブラーニングのため受講者を 20 人に制限する。

以上

以上がシラバスの内容である。授業のタイトルはイギリス近代史であり，シラバスではイングランド宗教改革から現代のイギリスと EU までイギリス近代史を中心に様々な主題を提示した。しかし，すでに述べたように，受講者は様々な時代の事柄・人物に関心を持っている可能性があり，テーマは必ずしも近代に限定しなかった。

次に moodle にアップロードした資料を紹介したい。

- ・スケジュール
- ・ガイダンス資料
- ・イギリス史文献リスト 2020
- ・参考文献の書き方と資料収集の方法
- ・イギリス王室系図
- ・中世イギリスの地図（百年戦争の時代）
- ・イギリス領植民地の地図
- ・履修者名簿

このような資料を用意し，学生には各自ダウンロードおよび印刷してもらった。ガイダンス資料や資料収集の方法については次の第 3 章で詳しく述べたい。王室系図は古代から最新の王族が記載されているものを用いた。また，現代だけでなく中世の時代のイギリスとフランスの地図をアップロードした。イギリスは百年戦争でフランスに敗北するまでフランスに広大な領土を所有していたため，フランスの地理も重要である。さらにイギリスは世界中に植民地を所有していたため，イギリス領植民地の領土が分かる世界地図も必要である。学生はイギリス植民地支配や植民地について興味を持つ者も多い。

3 ガイダンスおよび二回目の授業内容

初回のガイダンスは以下のような内容で行った。

- ・オンライン授業環境のテストを行い，zoom のビデオ，音声，画面共有，DVD 再生，チャット，挙手などに問題がないか教員と受講者双方で確認した。
- ・受講者が資料をダウンロードし，印刷できたかを確認した。
- ・何月何日に誰が報告するか仮スケジュールを決め，後日調整することにした。
- ・シラバスをもとに授業の進め方と評価方法，発表の仕方を説明した。
- ・自己紹介および発表したいテーマを発言してもらった。

二回目の授業は以下のような内容であった。

- ・スケジュールを確認し決定した。
- ・参考文献の書き方を説明した。
- ・文献収集の方法を説明した。
- ・イギリス文化の講義を行った。

ガイダンスでは最初にオンライン環境アンケートを行い，プリンターを所有しているか，所有し

ていなくても印刷が可能な環境であるかも調査した。その結果、全員が自宅にパソコンを所有しており Wi-Fi にも問題はなかった。プリンターを所有している学生も多く、持っていない場合も大学の図書館等の施設やコンビニエンスストアで印刷が可能であった。学生たちは前期にオンライン授業をすでに受講しており、環境は整っていたようである。ただ、その後の授業では、カメラの調子が悪く時々ビデオをオンにできない不具合が出る学生がいた。自宅のパソコンに不具合が続く場合は、各学部の学務係で学生にノートパソコンの貸し出しをしてもらえないか相談するよう伝えた。教育学部学務係ではそのような貸し出しを行っている。

次に授業内容を説明するとともに、各回の報告担当者を決めた。この授業は一回につき2人が報告し、次に全員が参加して質疑応答を行う形式である。

受講者への注意をまとめたガイダンス資料の内容は以下のようである。

この授業はすべてオンライン形式 (zoom) で行います。基本的にリアルタイムで、オンデマンドの回もあります。moodle を利用します。シラバスも参照してください。

★ 成績評価について

・出席の取り方

正当な理由 (忌引き、教育実習、入院、病気など) がある場合は、事前に申し出てください。

13:10 moodle で出席を取る。

13:15 発表開始。

13:25 を過ぎて入室すると遅刻になり、遅刻3回で欠席1回になります。

14:10 を過ぎた場合、二人分の報告はすでに終わっているため欠席になります。

・プレゼンテーション、毎回の発言内容

履修者の定員は20人。準備を含めて発表約10分。人数にもよるが質疑応答約20分。(一人約30分)

一回の授業で2人に発表してもらいます。発表者の人数によって、発表時間や質問時間を調整し

ます。

イギリス史に関する個別的なテーマを選び、調査・発表してください。ただし、なるべくテーマが重複しないようにします。例年希望者が多いため、イギリス料理はなるべくやめてください。タイトルは「イギリス近代史」となっていますが、時代は古代から現代までどの時期でもかまいません。

報告者はパワーポイントの提示資料および word でレジュメを作成し、報告する週の月曜午前中までに (正午 12:00 締め切り) moodle で提出してもらいます。こちらでそれらの資料を moodle にアップロードし、全員が閲覧できるようにします。

パワーポイントのスライドの数は自由です。(10枚くらい) ナレーションはつけなくてよいです。レジュメは A4 word 2~3枚です。タイトル、氏名、日付、概要、目次、図版などを入れ、最後に文献リスト5冊以上を書いてください。

インターネットで調べてもよいですが、研究書や学術論文を必ず5編以上読んで使用すること。研究者が執筆し注がある文献がよいですが、注のない本、新書や文庫でもかまいません。それでも巻末に参考文献リストが掲載されている本が望ましいです。信用できないサイト、旅行ガイドブック、エッセー等は絶対に使用しないでください。

自分の発表を無断欠席した場合、単位の取得は非常に困難になります。

発表後、全員でディスカッションを行う予定ですが、こちらで名簿順に指名して質疑応答という形になるかもしれません。どれほど積極的にクラスに参加したかを重視します。

・課題 (コメント) の提出

授業後は毎回課題として、その日の発表に対するコメントを提出してもらいます。(内容で分かったこと、分からなかったこと、プレゼンの仕方で良かった点など) 発表者は自分自身の発表の内容およびプレゼンの様子について感想や反省点等を書いてください。字数は自由です。これらのコメントは教員のみが見ることができて、受講者には

公開しません。

・最終レポート

発表して終わりではなく、自分の発表内容をまとめたレポートを必ず提出してください。質疑応答を参考にして、発表の時よりも改良するようにします。書き方と注意事項は後日、moodle で提示します。

以上

授業の進め方や成績評価の方法を説明した後で、学生にはイギリス史で関心のある事柄や人物、仮のテーマについて発表してもらった。人数が 20 人程度の演習なので、教員だけでなく、発表者を含む学生全員にビデオをオンにもらった。やはり、お互いの顔が分かった方が発表や議論はしやすいと思われる。

二回目の授業では受講者が確定しており、スケジュールを再確認した。次に画面共有をしながら参考文献の書き方を例を用いて説明し、正確に書誌情報を書くことができるようにした。単著の本、共著の本、共著の中の論文、雑誌論文、それぞれの書き方を説明し、さらに、使用したレジюмеやレポートには文献リストを必ず書くことを強調した。この授業に限らず、レポートや卒業論文において参考文献リストや出典を示す注をつけることの重要性を説明した。

その後、moodle にアップロードしておいたイギリス史文献リスト 2020 や参考文献の書き方と資料収集の方法という資料を用いて、本や論文の収集方法について説明した。図書館のホームページを画面共有しながら、OPAC と CiNii を実際に使用しながら実施した。キーワードで検索すると多数の書籍や論文がヒットする。その際、あまり関係のない文献や書評までヒットしてしまうので、どの文献を選ぶかは重要である。直接、図書館の歴史のコーナーの本棚に行って本を探してもよいが、事前に大分大学図書館ホームページの OPAC で関心のあるキーワードを入力し、大分大学図書館、県立図書館での本の所在を調べておいた方がよい。また、大分大学図書館にはイギリス史の本の所蔵が少ないため、地元の公立図書館等も利用するこ

とをすすめた。図書館が雑誌を所蔵していれば、紙媒体の雑誌の論文をコピーすることができることも述べておいた。日本語の文献をさがすための CiNii は非常に便利なツールなので、利用方法を具体的に示した。大分大学図書館のホームページに CiNii Books (大学図書館の本をさがす) CiNii Articles (日本の論文をさがす) のリンクがあり、とりわけ CiNii Articles でキーワード検索すると、無料で PDF 形式でダウンロードできる論文がヒットして便利である。

また、インターネットからの情報を利用する際の注意点を説明した。wikipedia などネットで調べたい事柄を検索することは一般的であるが、ネット上には根拠が不明な不確かな情報が氾濫している。出版された信用できる本や学術論文を使用することが前提であり、ネットを使ってもよいが参考程度にとどめるべきであろう。ネットを使用する場合は、教育委員会や県庁、国連、文部科学省等の公的機関といった信用できるサイトだけを参考サイトとして記載するよう指導した。閲覧したサイトのタイトル、URL、最終閲覧日といった情報を記入する必要がある。ネットの情報だけで報告したりレポートを書いたりすることは認められず、出版された文献を必ず使用するよう指示した。文献であれネットであれ、無断で使用することはできず、文献リストに記載しなければならないこと、論文を執筆する時は文献を引用・参照したら必ず出典の注をつけ、盗用や剽窃に注意することも強調した。

本授業では、受講者は自分で設定したテーマに即した参考文献を探し、読解して報告資料や報告原稿を作成する。また、報告後には質疑応答や教員からのコメントをもとに内容を改良して、自分自身で最終レポートを作成することになっている。そのため、他人の文章を書き写したりすることはできない仕組みになっている。さらに報告資料と最終レポート両方に必ず参考文献リストを記載して、使用した文献を最低 5 編以上挙げなければならないとしている。このように、本授業では受講者に文献の無断使用をしないように、不正が起きないように工夫しており、彼らもルールを守って受講していた。

資料収集の方法や参考文献の書き方を説明した後、筆者がガイダンス用の「イギリス文化」の講義を約30分行った。パワーポイントを用いて、イギリスの名称や地理、国旗の変遷について説明した。日本ではイギリスと呼んでいるが、正式な名称はグレートブリテンおよび北アイルランド連合王国 (the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, UK) であり、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの四つの地域から構成された連合王国であることを受講者に理解してもらった。事前にオンデマンドにも対応できるように、このパワーポイントにナレーションをつけたバージョンも用意していたのであるが、リアルタイムで説明することにした。

4 授業の考察 (テーマ, 報告内容)

例年、この授業は対面のアクティブラーニングを取り入れた演習形式であり、moodle を利用していた。今回も基本的には授業の方針は同じだが、初めて同時双方向のオンライン形式で実践したのである。当初20人の学生が履修登録していたが、そのうち2人は登録を取り消し、別の2人は初回から無断欠席が続いていた。したがって実質的に受講者は16人であった。

以下、受講生が選んだテーマの一覧である。

- ・産業革命について
- ・百年戦争とその周辺
- ・阿片戦争
- ・7年戦争と2人の帝国建設者
- ・ウィンストン・チャーチル
- ・第二次世界大戦 ～アメリカ参戦まで～
- ・騎士という存在
- ・チャールズ・ダーウィン
- ・世界恐慌とブロック経済
- ・ブリテン・アイルランドとケルトについて
- ・スコットランドとイングランドの関係性
- ・シャーロック・ホームズの生きたヴィクトリア朝
- ・イングランド・フットボールの成立と今
- ・ヘンリ8世と6人の妻たち
- ・イギリスとキリスト教
- ・ロンドン塔

テーマの傾向としては例年以上に戦争を扱うものが多かった。しかし、内容は重なるものはなく多様であった。約10分の報告なので、あまり大きなテーマにはしないように注意しておいた。だいたい受講者は適切にテーマを選定しているが、難易度の高いものと低いものがみられ、このような難易度の差は毎年起きている。たとえば、「ヘンリ8世と6人の妻たち」では単にヘンリ八世の妻の変遷をたどるものになっていた。そのような妻の変遷だけでは内容が薄くなってしまうため、ヘンリ八世が最初の妻キャサリン・オブ・アラゴンとの婚姻を無効として、アン・ブリンと再婚した背景として、イングランドの宗教改革について調査する必要があることをアドバイスした。そのほか、「ウィンストン・チャーチル」のように漠然としたテーマもあった。チャーチルの活動は多岐にわたっている上に、政治家としての活動も期間が長く重要な事柄が多い。彼の生涯すべてを説明すれば内容が薄くなっていき、第二次世界大戦の時期に絞るなどの工夫が必要であることを指摘した。一方で「チャールズ・ダーウィン」というタイトルも漠然としていると思われるが、この報告は彼の生涯の中で進化論を中心に検討していたため、問題はなかった。ただ、学生には副題をつけるよう助言すべきであった。そのほか、「7年戦争と2人の帝国建設者」という報告ではジェームズ・ウォルフとロバート・クライヴというあまり知られていない軍人を取り上げたものもあった。前者はカナダ、後者はインドへの植民地拡大に貢献した。

以前はイギリス料理を扱う学生が複数みられ、単に料理の説明になりがちであったが、今回はいなかった。ビートルズやシャーロック・ホームズも比較的人気の高いテーマであり、今回もシャーロック・ホームズが挙がっているが、ホームズ自身というよりもヴィクトリア朝の社会背景についての報告であった。

産業革命や宗教改革はイギリス史では比較的人気のあるテーマである。ただ、宗教改革はキリスト教の知識が求められるため、やや難解に感じる

学生が多いと思われる。イングランドの宗教改革期は変化が多く、カトリック→形式的なプロテスタント（ヘンリ八世治世）→カトリック（メアリ治世）→急進的プロテスタント（エドワード六世治世）→穏健プロテスタント（エリザベス治世）といった宗教の変化の流れがある。カトリックとプロテスタントの違いや、ヘンリ八世治世に成立したイングランド国教会について調査し理解する必要があるが、やや難解であろう。

第一次世界大戦や第二次世界大戦も例年、選択されることが多いテーマである。今回は第二次世界大戦のみであったが、やはりウィンストン・チャーチルというイギリスの著名な首相の影響があると思われる。近現代史の人気の高いが、毎年古代や中世のテーマを選ぶ学生もいる。そのほか、厳密な歴史学というよりは、現代のイングランドのフットボールやプレミアリーグについて取り上げたテーマもあった。ロンドン塔については報告した学生が理工学部所属で建築に関心があったのか、ロンドン塔の建築について述べられていた。

難易度の高いテーマを選ぶ学生もいた。「スコットランドとイングランドの関係性」という報告では、名誉革命後のイギリスにおけるジャコバイト（Jacobite, ジェームズ派）を扱っていた。名誉革命によってジェームズ二世はイギリス王位を捨て、ウィリアム三世とメアリ二世が共同即位したのであるが、ジェームズ二世と子孫はフランスに亡命しながらイギリス王位を主張しており、彼らの支持者ジャコバイトが存在していた。ジャコバイトはスコットランドに多く存在し、イングランドは名誉革命体制を確立するためスコットランドと戦争したのであった。ジャコバイトは個人的に重要なテーマであると考えているが、イギリス史の中でも研究は少ない分野である。

また、アイルランドも比較的マイナーなテーマであり、文献も少ないため調査が難しい面もあるが、受講者には自由にテーマを決めてもらっている。本授業は卒業論文や各自の専門分野の授業とは異なり、教養教育科目であり、比較的短い報告を行うものである。以前、どうしてもテーマが決まらない学生には教員が候補を挙げて百年戦争にもらったこともあったが、ほとんどの受講者

は自分でテーマを決定している。好きなテーマを選んだ方が熱心に調査に取り組むことができるであろう³⁾。そのほか、学生たちはパワーポイントの作成に慣れている者が多く、提示資料はかなり上手に作成されていた。

5 授業の考察（授業の進行、時間配分およびスケジュール管理）

次に実際の授業の進行、時間配分およびスケジュール管理について述べたい。報告者には授業の2日前までにパワーポイントとワードのレジメの資料の添付ファイルを教員へメールするよう指示していた。それらの資料を教員が moodle にアップロードし、事前に全員が閲覧・印刷できるようにしておいた。幸い、資料を提出してこない学生はいなかったが、未提出の場合は授業に支障が出てくるため、締め切りまでに資料を送ってこない場合の対処が必要だと思われた。今年度（2022年度）の対面授業では、資料を期限までに提出できなかった報告者に対して、自分でレジメを全員分印刷して教室に持参するようしており、資料をコピーした USB メモリも持参させ、パワーポイントを教員がスクリーンに映すようにしている。学生たちは授業中に、各自のスマートフォンで moodle にアップロードされたパワーポイント等の資料を閲覧しながら受講しているようであった。

オンライン形式の演習ではパワーポイントを画面共有して学生に報告してもらった。報告者の画面共有を許可して学生側に提示してもらう方法もあるが、教員が行うことにした。プレゼンタイマーで時間を計り、報告時間が少ない場合は付け足してもらい、全員平等に報告してもらった。準備不足で時間が短い学生、時間を大幅に超過する学生も若干みられた。プレゼンテーションの内容や質は対面形式であった例年通りであり、オンラインだからといって質が低下したり、途中で発表をやめたりする学生はいなかった。その後の質疑応答は、対面であってもなかなか質問で挙手する学生が少ない上に、誰かが質問をし始めるまでの待ち時間が長いと授業時間がなくなるため、こちらで名簿を使って指名する方式を取った。毎回、名簿の上、中間、下からというように順番を変える

ように工夫した。質疑応答は毎回充実したものになり、オンラインであってもほとんど問題はなかった。質疑応答が対面の場合は活発化し、オンラインだと不活発になるというようなことはなかったと考えている。

また、報告の際、対面の場合は教員が早めに教室に行ってパソコンとプロジェクターを準備し、パワーポイントを提示していたため、時間と労力がかかっていた。また、パソコンやプロジェクターの不具合のためにパワーポイントが映らないなどのトラブルが起きることがあった。しかし、zoomの場合は資料を画面共有するだけなので非常に授業を進めやすくなった。

ただし、オンライン授業の場合も様々なトラブルが想定される。まずパソコンの不具合である。筆者は予備のノートパソコンも用意しているが、学生はパソコンの調子が悪い時はスマホで受講していたようである。また、Wi-Fi の状況やアクセスの集中によって問題が起きる可能性がありえる。2020 年度前期に他大学において、あまりに多数の学生がアクセスしたために moodle が開かなくなった。また、zoom でエラーが起きて授業ができなかったり、動きが遅くなったりしたケースもあった。zoom ではないが、2022 年 7 月には世界各国でマイクロソフトの Teams の障害が発生したため、オンラインでの会議や授業が行えなくなった。停電はあまり起きないと思われるが、2019 年 7 月に大分大学および大学周辺で停電が起きたこともあった。停電の場合は対面授業もオンライン授業も行えなくなる。そのほかの問題点としては、教員側が授業開始時間を忘れて、zoom の開始時刻を間違えて設定したりする危険があるので注意すべきであろう。zoom では遅刻してきた学生を入室させるよう気を付ける必要もある。

本授業の報告時間は 10 分と決められていたため、時間をあまり超える報告はなかったが、質疑応答はどれだけ時間がかかるか予想が難しい面がある。これは対面の場合も同じであるが、特にオンラインの場合は 60 分程度で授業を終了させるため時間の管理が重要であった。報告者が質問に対して答えるのに考える時間がかかる場合や、質問や回答が長いために時間を取られることが多い。

そのため授業を 60 分程度で終わらせることは困難であった。また、授業開始する際に zoom のレコーディングをするが、これを忘れそうになることがあり注意が必要であった。さらに授業終了後にレコーディングを変換するが、変換には 30 分程度かそれ以上の時間がかかることが分かった。次の授業をオンラインで行う予定がなかったので問題はなかったが、オンライン授業を続けて行う場合はしっかりと時間を守る必要がある。

毎回の授業では報告と質疑応答を行っていたが、報告者がきちんと準備をしていた報告では様々な質問への回答もできており、よく分からない場合もある程度までは答えていた。反対に準備不足の報告も若干見られた。その場合は質疑応答においてうまく答えられないことが多く、筆者が分かる範囲であれば助言をするほか、調べておくように指示をした。ただ、このような準備不足で報告や回答がうまくできないケースはオンライン授業に限ったことではなく、対面授業でも起きている。

発表や質疑応答の後は課題として報告についてのミニレポート（コメント）を提出させた。これらのコメントも細かく内容を書くものから、「〇〇について知らなかったため勉強になった」などの簡単なものまで差が見られた。コメントの書き方について、もっと内容をふまえて書くように注意をしておくべきであった。コメントのほかに、報告後に改良したパワーポイントとレジュメを提出させ、最後にまとめた最終レポートの課題を出した。レポートの課題は「授業中に個人で発表した内容をまとめてください。発表した時になされた質問を参考にして、発表後に調べたことを入れて、内容を改良して書いてください。」というものであった。「インターネットなどからのコピー&ペーストは絶対にしないこと。最後のページに必ず実際に読んだ本や論文の参考文献リストをつけ、最低 5 編以上使用すること。」という規定もつけた。今回のレポートは参考文献を 5 編以上記載する必要がある上に、自分のプレゼンテーションをもとに作成するので、他人が書いたレポートや他人がネットに載せた内容を写してレポートを作成することは不可能である。

課題と最終レポートはすべて moodle 上で提出

させたが、最終レポートを期限までに提出しない学生が数名みられた。やむをえない理由で事前に相談があった場合は締め切りを延長するが、今回はそのようなケースではなかった。レポートの内容については、オンライン授業であったために質が低下するというようなことはなく、全員が適切に作成していた。最後に、教員が全員分のレポートを添削して気づいた点をメールで返信した。これは moodle 上でレポートにコメントしてもよかったかもしれない。

2020 年度のイギリス近代史は全面的に同時双方向のオンライン形式で行ったが、2022 年度の授業はほぼすべての回で対面で実施しており zoom は使用しなかった。授業によっては一部を対面で行い、あとはオンライン（同時双方向・オンデマンド）で行うという形もありえるであろう。筆者も部分的に対面やオンラインを取り入れる方法は有益だと考えている。ただし、その場合は教室を確保する必要がある。学生が講義を聞くだけであれば図書館でオンライン授業を受講できるが、学生が報告や発言をする授業もある。その時、学生が自宅ではなく大学にいる場合はやはりその授業用の教室が必要である。

学生にとって、学期の途中で対面が急にオンラインになったり逆にオンラインが対面に変わったりすることが困ると思われる。実際、コロナ感染状況の拡大のために急に対面が禁止されオンラインに変更になった時期があった。筆者は最初からすべてオンライン、対面はしないと決めており統一していたため学生間に混乱や問題は起きなかった。また、1 限がオンラインで 2 限が対面など、一日に異なる形式の授業が入っている場合、対面が入ると大学に登校しなければならない。そして、オンライン授業を自宅では受講できず、大学で受けなければならなくなる。その場合もオンライン授業を受ける教室が必要である。すべてオンデマンドで視聴する授業の場合は教室は要らないかもしれない。2020、2021 年度は教育支援課や学務系の教室の割り当ての業務が大変であったと推察している。

また、初回から最後まで授業全体のスケジュール管理の難しさを実感した。以前から筆者は発表

者が欠席した場合に備えて講義や映像を用意している。発表者が病院を受診するような病気、けが、入院、忌引き等の正当な理由で急に欠席になる場合もある。その場合は予備日に実施してもらうが、正当な理由の欠席者が多く学期末までに全員が報告し終わるのか不安になった年もあった。その場合は 1 回の授業において、2 人ではなく 3 人に報告してもらうことが考えられる。そのほか、2022 年度前期に新型コロナウイルス陽性者の濃厚接触者が増えた時期があり、報告者が濃厚接触者になった場合は登学できず報告もできなくなった。このような時に対面授業ではなくオンライン授業であれば、この学生は当日、自宅で発表できたはずであった。

特に近年は新型コロナウイルス感染状況だけでなく、地震や台風といった自然災害が増えている。急に翌日の授業が休講になることもありえるし、実際に新型コロナウイルス感染拡大や台風のために、翌日は休講にするという大学からの要請がなされたこともあった。授業期間に急な日程変更が起きると、特に演習形式の場合は報告者へ連絡をしっかりと行う必要があり影響が大きい。今後も急な休講やオンラインへの変更などがありえると考えられるため、危機管理をしておかなければならないであろう。試行錯誤している状態であるが、予備日を設けるなど余裕を持ったスケジュールを作成することが重要だと思われる。

6 おわりに

以上、イギリス近代史のオンライン授業について考察してきた。本授業は基本的にこれまでの内容と授業方針を踏襲したが、初めてのリアルタイムでのオンライン形式の演習であった。事前の授業準備をしっかりと行うほか、ガイダンスでオンライン環境テスト、アンケートを丁寧に行った。幸い、毎回の授業でトラブルはなく、プレゼンテーションおよび質疑応答も活発に行うことができた。確かに対面の方が受講生や教員が直接交流することができる。オンラインよりも会話や助言、質問がしやすい環境であると言えよう。しかし、オンライン授業を経験してみると、安全に授業を行えるだけでなく、特にプレゼンテーションについて

は教室で行う際の時間と労力が軽減されると思われた。パワーポイントの提示資料を画面共有で使用しながら報告してもらったが、問題なく進めることができた。また、質疑応答も対面と同様のレベルで行うことができたと考えている。このようにオンライン形式の演習は学習効果が高く、成果があったと思われる4)。

一方、課題もいくつか述べておきたい。まず、パソコンやWi-Fi環境に不具合が起きた時の不安がある。また、授業終了後にzoomのレコーディングを変換するのに時間がかかるため、早めに授業を終わらせる必要があることに注意しなければならない。過去に実施した人数が多い演習の場合、対面であっても時間が足りないと思うことがあったが、オンライン形式の場合は授業時間の延長ができず、時間が厳しい。そのほか、本授業ではプレゼンテーション後に受講者に一人ずつ質問させて、それに報告者が回答し、教員はそれを聞きながら助言するという形式を取っており、グループディスカッションを行っていなかった。今後の試みとして、その報告について5人ずつ4グループくらいに分けて、グループディスカッションを試してみてもよかったと思われる。あらかじめグループのメンバーを決めておくか、その場で分けた方がよいのかがはっきりしないが、毎回同じメンバーで固定しておいた方が、採点はしやすいかもしれない。zoomのブレイクアウトルームを利用してグループディスカッションを行うことができるが、今回はその機能を利用しないで終わってしまった。今後、オンライン授業の機会があればグループディスカッションも実践していきたい。その場合、受講者全員が活発に討論しているか、何もしていない学生がいなかったかを教員が各ルームを回ってチェックする必要があると考えている。

なお、筆者は2022年度前期も教養教育科目、イギリス近代史を担当したが、この授業は対面で行った。2020年、2021年の二年間は教員も学生もオンライン授業が中心であったため、久しぶりの対面授業であった。当初は教室に備え付けられているパソコンやブルーレイレコーダーの使い方が分からなくなったり、プロジェクターにパソコンの画面が映らなくなったりするトラブルも体験した。

本稿で述べたオンライン授業の経験や改善点はあまり生かしていないが、テーマ設定やコメントの書き方の助言を改善することでできた。

対面の場合は、やはり教室での機器(パソコン、プロジェクター、ブルーレイレコーダー等)の不具合が起きるとその対処に時間がかかったため、画面共有が早く行えるオンライン授業にはメリットがあると思われた5)。今年度の後期の講義では、再びオンライン授業に取り組む予定である。その際は同時双方向ではなくオンデマンドによって実施予定で、授業で使用するパワーポイントやナレーションの準備をしていきたいと考えている。オンデマンドの試みは初めてであるが、オンラインの同時双方向や対面授業とは異なるメリットや課題が見えてくると思われる。受講者とのコミュニケーションが取りにくくなるため、講義内容を見直すとともにパワーポイント等の資料を準備し、moodleも活用しながら、より受講者の理解が深まるような授業になるように工夫していきたい。

注

- 1) オンライン授業の実践については次のような研究がある。米津直希, 宇田光, 五島敦子, 笹尾幸夫, 大塚弥生「教職課程カリキュラムの実践における現状と課題：オンライン授業の実践交流を手掛かりに」『南山大学教職センター紀要』第6号(2020年), 31-36頁; 井上 亘「人文系オンライン授業の開発—リモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性—」『教育研究実践誌』(常葉大学)第4巻第1号(2020年), 35-42頁; 赤堀侃司『オンライン学習・授業のデザインと実践』ジャムハウス, 2020年; 千葉大学教育学部附属小学校『オンライン授業でできること, できないこと』明治図書出版, 2020年。
- 2) アクティブラーニングを実践した西洋史の研究として、拙稿「西洋史の授業とアクティヴ・ラーニング—西洋文明論I, IIを中心に—」『大分大学高等教育開発センター紀要』第10号(2018年), 39-47頁がある。
- 3) 本稿は西洋史, 特にイギリス史についての授業実践を扱っているが, 大学における世界史

のオンライン授業の実践については、甘利弘樹「外国史・世界史授業のオンライン授業についてー兼論「外国史・世界史授業のアクティブラーニング化への試み」ー」『大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第38号（2021年），49-64頁；甘利「医学史を学ぶオンライン授業」『大分大学高等教育開発センター紀要』第13号（2021年），1-18頁を参照。

- 4) 実験や実技，教育学部での模擬授業の指導など対面授業の方が学習効果が高い科目があることは確かであろう。特に模擬授業は学生自身が教室で実演すれば，スキルは上達し，教員も指導しやすい。ただ，まったくオンラインでは模擬授業の指導ができない訳ではないと思われる。最近では学生が自宅等で模擬授業を行って動画を自分自身で撮影することもあり，そのようなスキルも必要になっているようである。その動画を教員が視聴して指導することも可能である。また，筆者は世界史演習という教育学部の授業において，模擬授業についての課題を出し，学生一人一人に指導案の添削を行ったことがあるが受講者には好評であった。
- 5) 対面授業の良さはあるが，本授業を通してオンライン授業のメリットも見られたのである。受講者からは特に苦情は聞かれなかった。オンライン授業は自宅にいながら受講できて通学時間もかからない，教室の設備の不具合等がないため時間を無駄にしないで良いという意見もあった。対面授業とオンライン授業が併用されれば，学生の満足度や教育効果が増加すると思われる。対面で授業しながら，それをオンラインで同時配信する授業も一部の大学や学校で行われている。そのような形式を教員一人で行っているケースもみられる。しかし，対面授業を同時配信する形式は職員や他の教員の方々の支援がなければ，教員にとって難易度が高く負担が重であろう。

今後，新型コロナウイルスの感染状況と関係なく，

学校や大学，企業等でオンライン形式の授業や学会・研究会，会議は継続するであろうし，継続すべきではないかと思われる。対面のメリットもあり回帰も見られるが，やはり移動の時間・労力や旅費の負担がないオンライン形式は非常に効率的で有益な面があると思われる。最近では対面とオンラインによるハイブリッド形式の研究会や学会も増えてきているようである。

参考文献

著書

- 青柳かおり（2008年）『イングランド国教会ー包括と寛容の時代ー』彩流社
- 赤堀侃司（2020年）『オンライン学習・授業のデザインと実践』ジャムハウス
- 有賀夏紀他編（2009年）『アメリカ史研究入門』山川出版社
- 岩井淳（2010年）『ピューリタン革命と複合国家』山川出版社
- 川北稔編（1998年）『イギリス史』山川出版社
- 木畑洋一他編（2004-2007年）『イギリス帝国と20世紀』全5巻，ミネルヴァ書房
- 木畑洋一，秋田茂編（2011年）『近代イギリスの歴史ー16世紀から現代までー』ミネルヴァ書房
- 君塚直隆（2010年）『近代ヨーロッパ国際政治史』有斐閣
- 君塚直隆（2022年）『イギリスの歴史』河出書房新社
- 近藤和彦編（2010年）『イギリス史研究入門』山川出版社
- 甚野尚志，踊共二編（2014年）『中近世ヨーロッパの宗教と政治ーキリスト教世界の統一性と多元性ー』ミネルヴァ書房
- 千葉大学教育学部附属小学校（2020年）『オンライン授業のできること，できないこと』明治図書出版
- 中央大学人文科学研究所編（2001年）『ケルト復興』中央大学出版部
- 村岡健次（1995年）『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房
- 村岡健次（2002年）『近代イギリスの社会と文化』ミネルヴァ書房

村岡健次，川北稔編（2003年）『イギリス近代史—宗教改革から現代まで—』改訂版，ミネルヴァ書房

森田安一編（2010年）『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』教文館

翻訳書

ピーター・クラーク，市橋秀夫，椿建也，長谷川淳一，西沢保訳（2004年）『イギリス現代史—1900—2000—』名古屋大学出版会

シェリダン・ギリー，ウィリアム・J・シールズ，指昭博，並河葉子監訳（2014年）『イギリス宗教史—前ローマ時代から現代まで—』法政大学出版局

リンダ・コリー，川北稔監訳（2000年）『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会

J・R・H・ムアマン，八代崇，中村茂，佐藤哲典訳（1991年）『イギリス教会史』聖公会出版

論文

青柳かおり（2018年）「西洋史の授業とアクティブ・ラーニング—西洋文明論 I, II を中心に—」『大分大学高等教育開発センター紀要』第10号，39-47頁

甘利弘樹（2021年）「外国史・世界史授業のオンライン授業について—兼論「外国史・世界史授業のアクティブラーニング化への試み」—」『大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第38号，49-64頁

甘利弘樹（2021年）「医学史を学ぶオンライン授業」『大分大学高等教育開発センター紀要』第13号，1-18頁

井上 亘（2020年）「人文系オンライン授業の開発—リモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性—」『教育研究実践告誌』（常葉大学）第4巻第1号，35-42頁

米津直希，宇田光，五島敦子，笹尾幸夫，大塚弥生（2020年）「教職課程カリキュラムの実施における現状と課題：オンライン授業の実践交流を手掛かりに」『南山大学教職センター紀要』第6号，31-36頁

新書

秋田茂（2012年）『イギリス帝国の歴史』中公新書

君塚直隆（2007年）『ヴィクトリア女王—大英帝国の“戦う女王”—』中公新書

君塚直隆（2014年）『女王陛下のブルーリボン—英国勲章外交史—』中公新書

君塚直隆（2015年）『物語 イギリスの歴史』上・下，中公新書

辞典類

松村赳，富田虎男編（2000年）『英米史辞典』研究社